
醒めない夢に悪魔の口付けを

伊塚カナウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

醒めない夢に悪魔の口付けを

【Nコード】

N1529U

【作者名】

伊塚カナウ

【あらすじ】

「あたしの願いを聞き入れてくれないなら、神様をずっと呪ってやるっ！」

恨んでやるっ……………崇ってやるっ……………絶対に、絶対に許さない……………

あたしだけを残したことを後悔させてやる……………

必ず後悔させてやるんだからっ……………！

「なるほど、それは面白そうですね」

少女の強い思いに導かれ、白髪の青年は現れた。
彼は少女に手を差し伸べ、少女は了承して彼の手を取った。

それが、絶望の始まりだとは気付かずに。

- - - - -

第5回ルルルカップの落選作品。

テーマは『とらわれヒロインの脱出』

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

なお、当作品は他のサイトでも公開されています。

軽微な修正による多少の差異はありますが同一作品ですので、ご了承くださいませ。

契約は優しい口付けで

白く吐き出されていた息が見えなくなっていく。腕の中で瞳を閉じている董すみれの顔には自身が流した真つ赤な血。肌はどんどん白く抜けてゆく。

菖蒲あやめは彼女に死が近付いているのをはつきり理解した。

(やだ……嫌だよ……董がいなくなっちゃうだなんて……)
身体の半分を持っていかれるような、そんな感覚だった。

(董……スミレっ……スミレを連れて行くなっ！ スミレだけを連れて行くなよっ！)

大切に愛おしい妹。

双子なのだからどちらが上だなんて区別はいらないよねと何度も話したのに、董は菖蒲のことをお姉ちゃんと呼んで慕っていた。少々引つ込み思案なところがあつて、何事にも積極的に振る舞う菖蒲の後ろをいつもついて回るような少女だ。好奇心旺盛であるのにいつも行動が伴わなくて、それで菖蒲が先に動いているようなところもあつた。

でも菖蒲はそんなことをわずらわしく思うことはなく、むしろ喜ぶ董の顔を見ていらればいいと気にすることはなかった。

(なんでなんだよ……)

これからもずっとそんな董の顔を見ていられると、何の疑いも持たずにいたのに。

こんな形で、急に奪われてしまうだなんて。

「董を生かしてくれるなら、どんな方法だって構わないっ！ だから、だから董を連れて行かないでくれよおっ！」

神様に届け、この願いよ届け。

菖蒲は必死に叫んだ。奇跡を起こせるなら、この今、この瞬間に起きてくれと。

(董だけを連れて行くなっ！ だったらあたしも連れて行けよっ！)

あたしたちは一緒なんだっ！ 一緒じゃなきゃ駄目なんだよっ！
ずつとずつと一緒にいられるんじゃなかたのかっ!?)

精気がどんどん失われていく幼い身体を強く抱き締めて、菖蒲は泣きじゃくりながら叫んだ。

「あたしから……あたしから董を持っていかないでよあっ!」

泣き叫ぶ声は人気のない通りに響いていく。真つ白な雪の中に沈んでゆく。

「あたしの願いを聞き入れてくれないなら、神様をずつと呪ってやるっ！ 恨んでやるっ……祟ってやるっ……絶対に、絶対に許さない……あたしだけを残したことを後悔させてやる……必ず後悔させてやるんだからっ……!」

「なるほど、それは面白そうですね」
声がした。

最初は気がおかしくなったんじやないかと菖蒲は思った。ここに人間は来ない、どんなに叫んだところで助けは来ない、どこかでそう諦めていたからだ。

だが、声は続く。

「しかし、ちっぽけな子どもが呪ったり恨んだりしたところで、君の言う神様ってやつはびくともしないことでしょうね。きっと気にも留めないと思いますよ」

少々高めの男の声。この目の前で起きている事故には興味がないらしく、どこかこの場に相応しくない口調で告げられた台詞が耳に入った。

(誰かいるっ!)

菖蒲は声の主を探すためにがばつと顔を上げ　そしてすぐにその人物の姿を捉えた。

血の海に立つ真つ白な髪の子。冬山岳部には合わない軽装だ。

一瞬天使のように映ったが、その瞳が紅く光ったのに気付いて天国よりも地獄に近い存在であることを菖蒲は察した。

「死神……?」

彼はそばにしゃがみこむと、その細くて長い指先で菖蒲のあごをなぞり、口の端をそっと上げた。ひんやりとした感触は彼の指先が外気で冷えているからか、それとも元からのものなのか。

「違いますよ。……どちらかと言えば悪魔の類いでしょ」

菖蒲の問いにゆっくりとした優しいげな口調で答え、彼は赤い唇をさらに真っ赤な舌で舐めて続ける。

「よろしければ、その強い思いを僕に喰わせてくれませんか？」

石榴石の瞳が菖蒲を値踏みするかのように視線でなぞり、誘惑するかのような顔を作ると優しく囁く。

「神様なんかにぶつけるには勿体無い極上の感情だ。僕が喰って処分して差し上げましょう」

「ふ……ふざけるなっ！」

菖蒲は白髪の男の手を払いのけ、董を引き寄せた。そしてにらみつけて怒鳴る。

「あたしは董を助けたいただけなんだ。董を助けてくれないヤツには興味はないっ！ 助ける気がないならどっかよそにいけよっ！」

「……面白いお嬢さんですね」

弾かれた手を撫でながら、白髪の男は笑う。

「心配はいりませんよ。タダで飯を喰うほどずうずうしくもないつもりです。その感情を糧に、僕は君の願いを叶えてあげると言っているのですよ。君が心の底から強く強く願っていることを実現させてやると、ね。悪くない話だと思っただけですが？」

「信じられるかっ！」

懐かない犬のように吠えて警戒する菖蒲。白髪の男は小さく肩を竦めた。

「わかりました。ならば今回は後払いにしましょうか。僕にそういう態度をした相手は君が初めてでしたもので、実に興味深い」

じっと探るように瞳を覗き込む。男の真っ赤な瞳に苛立ちを隠さない菖蒲の顔が映っていた。

「強情なお嬢さんには、論より証拠。百聞は一見に如かず。まずは何ができるのか、特別に見せて差し上げましょう」

言って、男は菖蒲が抱える董に手を伸ばす。ずるつと後退りして間合いを取り直そうとしたとき、男の手のひらから淡い光が漏れ出した。

(なんだ……?)

それがなんなのかわからず、菖蒲は呆然とその作業を見つめた。やがて光が止むと、董の口から白い呼吸が出ているのがわかった。「呼吸が……戻ってる……?」

董から流れ出ていた血も止まっているように思えた。顔色も戻りつつあるようで、冷たくなり始めていた身体も温もりを失わないで留まったように感じる。

菖蒲は改めて男の顔を見た。白い髪、赤い瞳。それらは印象的だが、なによりもとても容貌が整っている。まるで作られた人形のようにだ。

「あんだ、何をした……?」

「礼の前に、そういうことを言いますかね?」

呆れたと言わんばかりの口調による指摘に、菖蒲ははつとした。まったくそのとおりだ。

「あ、ありがとう……なんとか助かりそうだ」

「いえいえ。この程度のことなら、容易いですよ。しかし、今のままでは眠り続けたままでしょうね」

「え? ……どうして? 助けてくれたんじゃないのか?」

すやすやと眠っている董に目を向け、改めて男の顔を見る。

「命をここに繋ぎとめただけです。健康な身体を取り戻せたわけじゃないということです」

「ちよつと待てよ。なんでそんな中途半端な」

取り乱して身体を乗り出した菖蒲の口元に、男の細く長い指先が触れて制止させられる。菖蒲は恨めしそうに男へと視線を送った。

「君の願いを正確に叶えるには僕にその感情を喰わせる必要がある

のですよ。今はまだその少女は生きていただけの人形です。 さ
あ、どうします?」

指先が離れる。男は楽しそうに口元を歪めた。

(どうしますって……)

腕の中の白い顔を見る。穏やかな寝顔だ。だがこのまま目覚めな
いと聞かされてしまえば、それだけでは満足できない。

(決まっているじゃないか)

もう、迷わなかった。例えそれが引き返すことのできない過ちで
あったとしても。

「董を救えるなら、こんなもの、持って行けよ」

男の赤い瞳を真っ直ぐに見つめ返す。揺らがない、芯のしっかり
した決意の目で。

「よし。交渉成立です。初めての契約は刺激がちょいと強いかもしれ
ませんが、君ならきつと耐えられますよ」

不敵に笑って菖蒲のあごに手を添えると男はそつと触れるように
口付けをした。

それが天守聖人あまもりまこととの出会いだった。

願いを現実に変える方法

「夢を見たの。天守さんが私を外に連れ出してくれる夢」

窓のない病院の一室。董はそう告げて自嘲気味に微笑み、絶句する菖蒲に続けた。

「可笑しいわよね。そんなことあり得ないってわかっているのにさ」
そんなことないよ　そう告げて励ましたい気持ちを菖蒲はぐつと堪える。何の根拠もない励ましほど、相手を傷つけるものはない。
(諦めていない……そう思っているなら、励ますことはできるはずなのに……)

同じ顔をした妹のささやかな夢を聞いて、菖蒲はどうしてそこにいるのが自分ではないのだろうと思った。董だって自分と同じようにいろいろなものを見て、様々なことをたくさん経験して、笑ったり泣いたり、怒ったり楽しんだりしたいはずなのだ。それなのにこんな形で部屋に縛られているのを見ると、いたたまれない気持ちになった。

(あたしにもつと力があれば……あたしはこんなことのために董を引きとめたわけじゃないのに……くやしい)

返す言葉が浮かばずに黙っていると、ベッドに横になったままの董は明るい笑顔を作り直した。

「ねえ、アヤメお姉ちゃん？　高校ってどんなところ？　入学式、今日だったんだよね？　それ、制服でしょ？　良いなあ。ねえ、格好良い人、いた？　部活はどうするの？　あ、でもバイトもするんだっけ？　いろいろ大変そうだけど、充実するってそういうことなのかな？」

きらきらとした眼差しが自分に向けられていることに気付いて、菖蒲は我に返った。たくさんの機器に繋がっている妹の姿を見て、菖蒲は申し訳ない気持ちになる。それでも、暗い顔をずっと続けていくわけにはいかない。

(せめて、一日だけでも董に自由を与えることはできないのかな…)

菖蒲はささやかな希望を込めて精一杯の笑顔を作った。

* * * * *

真っ白な四角い建物は、病院と言うよりも研究所と説明する方が似つかわしく思えた。周囲も木々に囲まれていて、まるで隔離されているかのような場所だ。そんな丘の頂上に建つ病院へと延びる坂道を登り、菖蒲はたった一人の妹に会いに毎日足を運んだ。

この生活が始まってからもう一年以上になる。

(あ)

病院の出入口を出たところで、真っ白な髪青年がいるのに気付いた。

天守聖人だ。

昼休み中なのだろうか。淡い青色の清潔な衣裳を身につけ、眼鏡を掛けて腰を下ろしている様子は、看護師が休憩を取っているように映る。日中の陽射しが届くベンチで、文庫本に視線を落としたまま。どうも菖蒲がいることに気付いていないらしかった。

「聖人」

彼の正面に立ち、菖蒲はいつもするように声を掛ける。聖人はゆつくりと顔を上げ、にっこりと微笑んだ。

「おや、今日は帰りが早いですね」

「ええ、このあとバイトの面接があるんで」

菖蒲が真新しい高校の制服に身を包んでいるのに気付いたらしい視線を彼女の爪先から頭のとっぺんまで動かすと、さらに嬉しそうに笑顔を作った。

「その制服、なかなか似合っていますよ」

「どうも」

社交辞令で言っているのがわかってるので、菖蒲はさらりと返

す。

（あたし自身には興味のないくせに、よくそう言うことをしれつと言えるよな……）

天守聖人の今の立場は董を担当している看護師だ。しかしそれは仮の姿。董のそばにいるためにそういう設定にしているのだと菖蒲は知っていた。

聖人が口の端を、不気味にそっと上げた。

「僕に何か頼みごとですか？」

彼の黒かったはずの瞳が血の色に染まる。それを見て、春先だと言うのに背筋が寒くなった。菖蒲は何度もそれを見ているはずだが、決して慣れるものではない。しかし怖気ずに口を開いた。

「董が、さ。あんたを夢で見たんだって。外に連れ出してくれる夢。とっても嬉しそうに話し始めたのに、どうせ無理でしょって、寂しげに笑うのよ」

「それは僕に対する嫉妬の宣言と取るべきでしょうか？ どうして外に連れ出した人物があたしじゃないんだらうって、そう言いたいのですか？」

くすつと嫌な感じに聖人は笑う。

（わかっていて言ってるな、こいつ……）

菖蒲はそんな聖人の態度を無視して、話を続ける。

「あんたなら連れ出せるんじゃないの？ お医者様に外出許可を得られるように、あたし、何度も交渉したんだけど駄目だった。聖人、あんたならもつと手っ取り早く董を外に出してあげられるんじゃない？」

期待の眼差しを向ける。

だが彼は肩を小さく竦めて、首を横に振った。

「どうか。董ちゃんが簡単に外に出られないのはどうしようもない事実ですからね。現代の医療技術では、そううまくいかないでしょうよ」

指摘されて、菖蒲は董のいる部屋のことを思い出す。

窓のない狭い部屋。たくさんの機器が並ぶ無機質な室内。その中心で横たわったまま生きる同じ顔の少女。
ここは引いてはいけない、菖蒲は強く思い、交渉の続行を選択した。

「ね、そこをなんとかできない？ 一日だけでいいのよ。董のささやかな願いを叶えたいの。ほら、あたしたち、もうすぐ誕生日でね。何かプレゼントをしてあげたいのよ」

「へえ」

菖蒲の訴えに、聖人は自分の唇を舐めた。紅い瞳は興味深そうに菖蒲の顔を捉えたまま離さない。

（喰いつけ、喰い付いて来い。あんたにとってあたしは餌でしかないのだろう？ だったら、さあ、美味しい餌をくれてやる）

この場から逃げ出してしまいたくなるような嫌な気配が聖人から放たれている。それでも、菖蒲は負けじと立っていた。大切な董の願いを叶えるためなら、目の前にいる悪魔の端くれにやれるものはすべてくれてやろうと心の底から念じた。

そんな菖蒲を見て聖人はくすつと小さく笑う。気配が急に柔らかくなった。

「うん。悪くないね、その感情。強い精気を伴ってとても僕好み」

立ち上がり、読んでいた本をポケットにねじ込む。そして空いた手で聖人は菖蒲の頭を撫でた。

「まあ、元より僕は君には従うつもりでしたが」

「まったく……毎度だけど、そういうのやめてくれない？」

菖蒲は動かない。努めて出した落ち着いた声で返し、ただじつと聖人の次の行動を待つ。聖人が再びくすつと笑う小さな声が耳に入った。

「ごうしたほうがより美味しくなるのを知っちゃっているもんでね。ちよつとした味付けですよ」

「ぶざけるな。くだらない」

冷たく言い捨てる。苛立ちを内に封じ込めて。

そんな菖蒲に聖人は、すれ違いざまに彼女の耳に顔を寄せて告げた。

「その気持ちに迷いがないなら、僕はその願いを叶えましょう。董ちゃんをあの手から出す、それが僕と君とで交わす仕事の内容です。代償の準備、ちゃんとしておいてくださいよ？」

「わかっているわよ。好きなだけ、あたしから持って行けばいいわ」「じゃあ、交渉成立ということ。詳細は次回に」

その台詞が終わると同時に影が消えた。菖蒲は聖人の姿を探すが、もう彼は見える場所にはいなかった。その代わりに周囲に人々の声が戻ってくる。

(あまり彼には頼りたくないけど、こればかりは仕方がないものね……)

ぐつと強く拳を作ると、菖蒲は町に続く下り坂へと歩いていった。

* * * * *

「連れ出すとして、どこに行けばいいのですかね？」

高校の入学式の翌日。見舞いのために早足で坂を上って息が弾む中、病院の玄関で出会った聖人は顔を合わせるなり単刀直入に訊ねてきた。

「さあ。董が望む好きなところに連れて行ってあげたら良いんじゃない？」

足止めされたくない気持ちが出してしまう。早いこと董に会って、すぐにバイトに向かわねばならない。時間が惜しいが、聖人の計画の詰めもないがしろにはできない。

(ああ、面倒くさい……)

菖蒲はしぶしぶ足を止めて聖人と向き合った。

「それがどこかわからないから、聞いているんですが？」

彼は入り口の壁に寄り掛かり、腕を組んだままにこやかな顔で訊

ねてきた。菖蒲は苛立った気持ちを乗せて返す。

「担当している看護師なら、それとなく聞けるんじゃないの？ 身体が良くなったら、どこに行きたいかって。それにあんなならしれつと言えるでしょ？ いつもあたしに聞いてくるみたいにするれば良いじゃない」

聖人は菖蒲の早口な台詞に、眼鏡の奥の目をきゅつと細めた。

「君は残酷なことを言ってくれますね」

「残酷、だって？」

「希望を持たない者にそんな気休めにもならない問いを掛けるなんて僕にはできませんよ。それでもやれとおっしゃるなら、別料金をいただきますよ？」

「くっ……」

ぎりつと奥歯に力をこめる。菖蒲はただ聖人をにらんだ。

（あたしが董に質問できないとわかっていてそんなことを言うてるんだな……）

細められたまま見つめてくる瞳に赤い光が滲んでいるのに気付いた。何かを企んでいるのだろうとわかる。そして、見透かされると言うことも。

「……わかつたわ」

「別料金を支払う、と？」

「いいえ」

きっぱり答えてやると、聖人は怪訝な顔をした。端正な顔の眉間にしわが寄る。

「じゃあ、どうするおつもりで？」

「今、自由にならないとわかってから董は失望している。だって、動けるようになってからその質問をすれば良いでしょ？ 本人の意思に委ねればそれで良いじゃない。行きたいところがないって言うなら、やりたいことをやらせてあげてよ」

両手を腰に当て、菖蒲は胸をそらして堂々と行ってやった。彼の理屈に合わせるなら、これで問題がないはずだ。

「へえ……」

聖人は舌で自身の唇をそつと湿らせた。そしてふつと笑む。

「本当にその注文でよろしいですか？」

冷たい微笑み。

菖蒲はびくつと身体を震わせ、しかししっかりと足を踏ん張り直して対峙した。

「良いわよ。董が喜んでくれるなら、その代償は払うわ。そう契約すればいいんでしょ？」

要求はしっかりと伝えてくるのが聖人だ。何度かこのやり取りをしている菖蒲には、彼にこう宣言すればすんなりと応じることを知っている。

わかった、そう答えて今日は引いていくと思っていたのに、聖人は菖蒲の予想とは違う態度をした。

冷酷さで溢れていた表情が、悲しげな色を滲ませ始めたのだ。

「董ちゃんが喜ぶなら、ですか……」

言って彼は壁から離れ、菖蒲のあごに触れるとくいつと強引に持ち上げた。

「んっ……」

「君は、本当にそれで良いのですか？」

赤い瞳がかすかに揺れる。

「良いかって……どう言う意味よ？」

「董ちゃんが喜ぶことは、君にとっても喜びになるのか　その確認ですよ」

じつと向けられる視線。それをそのまま菖蒲は見つめ返す。真っ直ぐで揺るがないその瞳で。

「そんなの決まっているじゃない。董の笑顔を見るためにあたしはあなたにお願いをしているのよ？　董の笑顔を守ればそれでいいの。董の笑顔が見られればあたしは頑張れる。失われた董の笑顔を取り戻すためのよ、これは。だから充分にあたしのわがまま。あたしが勝手に思っていること。董が喜んでくれたのが見られたら、

あたしは喜ぶわよ。そんなこともわからないの？」

理解できない。感情を食い物にしている聖人がどうしてそんなことを言うのか、菖蒲には想像できなかった。

「そう。それならいいんです。君がそう望んでいるのなら、その思いを力に奇跡を起こして差し上げましょう」

そう告げると聖人はあごに触れていた手をどかし、その手を菖蒲の腰に回して引き寄せた。

「ちよっ……」

契約の度にキスをした。愛情のない口付け。菖蒲はそれを儀式として受け入れていたが、こうして触れ合うことは一度もなかった。

聖人の硬い身体の感触に、女の子のそれとは違うものを感じて菖蒲は焦る。異性の他人に抱き締められたのは初めての経験だった。

「しかし、もう少し先のことも、君自身のことだけじゃない回りのことも意識を向けたほうが良いこともありますよ？」

「そ、その話とこの状況は何の因果があるってわけっ?!」

菖蒲は抵抗した。だが、思うように動けない。体格差が、菖蒲の自由を奪う。

(放せ、放せ放せ……)

どうしてこんなに恐慌状態に陥ってしまったのかわからない。菖蒲はばたばたともがく。

そんな様子が面白かったのか、くすつと笑う聖人の声が耳に届いた。

「君がこんなに動揺するだなんて珍しい」

菖蒲の長い黒髪を指で梳きながら、顔を寄せる。

「あたしをからかうなっ！ 契約だけのビジネスの付き合いではないのに、馴れ馴れしくするなよっ！ そんな気もないくせにっ！」

叫び喚く菖蒲に、落ち着いた声で諭すように聖人は続ける。

「ビジネス以外の付き合い方だってできますよ？ 君が望むなら」

「はあっ？ 何？ 口説いてるわけ？ あんたにとってただの食料にすぎないあたしが、なんでそんなことを望むのよ？」

混乱する。どうして今、彼がこんなことを言い出したのか理解できない。

「君の中にある感情は恨みや怒り、妬みや悲しみだけではないはずですよ？ どうです。年相応の少女らしく、恋や愛から感情を生み出しては？」

甘く囁かれる言葉は、しかし菖蒲の心には届かない。傾きもせず、なびくこともせず、ただ拒み続けるのみ。

「ふざけんなつ！ あたしは董さえいてくれれば充分なのよ！ あたしにそんな冗談を言っつて楽しい？」

「動揺している君を見ているのは、普段の攻撃的な君を見ているのと同等、いやそれ以上に楽しいですよ。それに――」

髪を梳いていた指先がいつの間にか菖蒲のあごを捉えていた。そのまま強引に持ち上げて強制的に顔を上げさせ、口を塞ぐようにキスをする。いつもの触れるだけの軽いものではなく、その舌先が菖蒲の唇を優しくなぞる。

「んあつ……」

仰け反るように身体を捻った菖蒲を、聖人はすぐに解放した。菖蒲は唇を手の甲でごしごしと拭う。にらんでいる菖蒲の瞳には苛立ちと戸惑いが半々ずつ滲む。

そんな様子を見ながら、聖人はくすくすと笑った。

「君が抱く負の感情も美味しいですが、今のもなかなかのものでしたよ」

「く、喰ったからには、あたしの願いを叶えなさいよねっ！」

ぺろりと唇を舐めて笑顔を作る聖人に菖蒲は吠える。

(な、なんなのよ、今日は……)

心臓がばくばくと力強く、そして早く脈を打っているのがわかる。聖人が指摘してきたように動揺しているのは明白だ。

「これは董ちゃんの願いを叶えるための分ですよ。これだけの感情を伴った精気があれば、それなりのことは叶えてあげられるでしょう」

「そ、それなら了解よ。　　つてか、変な食べ方しないでちょうだい。いつものじゃ駄目なわけ？」

「たまには違う刺激も良いかな、と。僕も飽きてきちゃったんですよ」

「飽きるなっ！　あんたは食事の方法に文句をつけるのかっ！？」

文句を並べる菖蒲に聖人はその細くて長い指先を向ける。

「ふふっ……顔、赤いですよ？　どうしてですかね？　そんな顔で董ちゃんに会ったら、何を聞かれることやら」

「くっ……からかいやがって……」

視線を外したら負けのような気がして、菖蒲はずっと聖人をにらみ続けた。悔しいが、それしかできなかった。

「では、僕はそろそろ行きますね。仕事がありますから」

「さっさと行きやがれっ！　油売るなっ！」

「はいはい、ではまたのちほど」

音が戻ってくる。そこに広がっていたのは日常　　そのはずなのに、菖蒲にはいつもとはどこか違って見えた。

ここから私を連れ出して

昼食が終わり、看護師が膳を下げにやってくる時間だ。

聖人はいつものように董の部屋に入り、トレイに乗せられた皿を運ぶ。今日は彼女の誕生日であるため、決められたメニューのほかケーキがつけられていた。どの皿も空っぽになっており、体調は優れているらしいことが窺える。

「董ちゃん？」

普段なら皿を下げたら部屋を出て行ってしまふのに、部屋に戻った聖人は横になっていた少女に声を掛けた。

「……なんでしょうか？」

慣れていた対応と違うことに驚いたらしく、董は目を丸くしている。

「誕生日プレゼントとして、外に連れて行ってあげますよ」

「え？ 部屋から出られるんですか？」

目を輝かせ、董は上体を起こした。体中から伸びる様々な管が揺れる。

「長い時間の外出は無理ですけどね。どこか行きたい所はありますか？」

聖人の問いに董はくすつと笑う。その様子に聖人は首をかしげた。「何か？」

「いえ。夢の通りのものですから、なんだか可笑しくって。願えば叶うものなんですな」

「そうですね。強く願っていれば、大抵のことは叶います」

「じゃあ、私の身体が治らないのは、思いが弱いから、ですかね？」
自嘲気味に笑う董に、聖人は首を横に振った。

「いえ、そうではありませんよ」

「どうしてですか？ 私、早く身体を良くして、お姉ちゃんを自由にさせてあげたいって、ずっと願っていたんですよ？」

「……」

口を噤んで困ったような表情を浮かべる聖人に、董は柔らかな微笑みを取り戻して無邪気に告げた。

「天守さん。どこでも良いですから私を連れ出してください。そして一つ、お願いを聞いてくださいますか？」

「お願い、ですか？」

同じ顔をした菖蒲のそれとは違う様子に、聖人は正直戸惑っていた。その気持ちの動きが妙に上ずった声となって現れる。

「はい。大したお願いじゃないんですけどね、お姉ちゃんにもプレゼントをあげたくて。協力してくださいませんか？」

「ええ、そういうことでしたら」

そして、聖人は董を抱えて病室を出たのだった。

* * * * *

(そろそろ出たところかな?)

駅前の広場。菖蒲はロータリーの中央にある時計を見て、再び仕事に戻った。

初めてのバイトはティッシュ配りだった。近くにできた飲食店の宣伝が入ったポケットティッシュを駅前で配る簡単な仕事。そう聞かされていたし、実際に作業自体は単純なのだが、なかなか受け取ってもらえずに苦戦しているところだ。

(これを配り終わったら戻って良いって言っていたけど)

箱にたくさん詰められたティッシュを見る。このペースではまだまだ時間が掛かりそうだ。

(ずいぶんあるよなあ……誕生日にこれってのもどうなのだろう……)

はあっと小さくため息をついて、笑顔を作り直す。店の名前を言いながら、駅を出入りする人たちに手渡すのもだいぶ慣れては来て

いた。

(コツさえ掴めばスピードアップも狙えるよね。夕方までにはどうにかして、董に会いに行こう)

董の喜ぶ顔を思えばなんてことはない。今日の報酬を受け取ったら、そのお金でプレゼントを買おう、そう考えたとわくわくした。

「いいねえ。その笑顔。初めっからその顔をしていれば、もっとテイツシユも捌けたんじゃないの?」

「ん?」

話し掛けられて、菖蒲はむすつと顔をしかめた。馴れ馴れしく軽い口調のその声に、菖蒲は思い至らない。

(誰だ?)

時計の下にいる声の主に目をやる。

まだ肌寒い時季だというのに鎖骨が見える長袖のTシャツを身につけ、細身の黒いジーンズを合わせた青年が菖蒲の方を見て愉快そうに笑んでいた。髑髏の形をしたネックレス、金のブレスレット、ピアス。ちらちらとした雰囲気は、聖人の真面目そうな雰囲気とは間逆だ。

(待て)

聖人を連想し、辺りの様子に異変が生じていることに菖蒲は気がついた。人の姿がない。比較的繁華街であるこの駅の周辺にはありえない状況だ。

(この男、人間じゃない)

「怖い顔をしなさるなつて。董はあんたがそんな顔をするのを望んじゃいないだろうし」

「!?!?」

愛しい妹の名前を出されて動揺し、菖蒲はますます警戒を強める。

「あたしに何の用?」

「いやあ、双子の姉妹といっても、好みの男のタイプは違うもんなんだね」

ブーツの底に付けられた鋏がアスファルトを擦る音が響く。ゆっ

くりと男は近付いてきた。

「あたしの問いに答えなさいよ」

「くくつ。恐いかい？」

指摘されて、足が後退りをしているのに気付く。菖蒲は意識して動かないようにし、男と対峙した。

「……なんで、董を知っているの？ 何者？」

「あなたがよく知っている天守聖人と同類だよ」

「聖人と……」

その返事が意味することに、菖蒲は気が付き始めていた。

（董のことを知っていて、聖人と同じってことは……まさか、董も）

「お。その表情を浮かべるってことは、考えなかったんだ。自分だけが特別だって そう思ってた？」

男に言われた通りだったので、菖蒲は反論できない。ぐつと奥歯に力を入れて、ただ男をにらむ。

「董はね、ちゃんと気付いていたよ？ 聖人の正体についてもね」

「……え？」

正体を知っている、その台詞が菖蒲の脳内をこだまする。

「あなたと聖人が同類で、董はそれを知っているって……じゃあ、董はあなたに何か頼んだの？ あたしみたいに、何かと引き換えにして」

「さあてね。それには守秘義務があるからオレからは言えないな」

（守秘義務ってことは、董は何かこの男と契約している 一体何を頼んだって言うの？）

「ぐくつと唾を飲み込む」

「んじゃ、オレはこれで」

「ちよっ……あなた何しに来たわけっ!？」

くるりと向きを変えてどこかに行こうとする男に、菖蒲はすぐに声を掛けて引き止めようと試みる。

(わざわざそんなことを言いに来たわけがない。何か目的があるはず)
声を掛けられて、男は顔だけを菖蒲に向けた。にたっと嫌らしい笑みを浮かべ、ぶっきらぼうに答える。

「オレの新しい仕事相手の顔を確認しておこうかと思っただけさ」
新しい仕事相手 その台詞に嫌な気配を感じ、動揺した菖蒲は持っていたティッシュを落とした。

(今までの男と契約していたのが董だったとしたら……新しい仕事相手があたしになるのだとしたら……それって……)

冷や汗が流れ、喉が渇く。動悸が激しい。

「そうそう。オレは望月朔夜もちづきさくや。願い事があるならその名を呼んでくれよ。協力するぜ」

迷わなかった。それが悪魔の囁きだとしても。

「待って、望月朔夜。頼みがあるの」
菖蒲の思いの籠った声は、彼の興味を引くには充分だった。

* * * * *

瞬間移動のごとく、朔夜に導かれるままにやってきた場所は見事なすみれ色の絨毯が広がる河川敷だった。

貸切のように静かな周囲に目をやり、そして目の前に立つ少女と白髪の青年を確認する。待っていたらしい少女が、ゆっくりと唇を動かした。

「ありがとう、望月さん」
やはり面識はあったようだ。董は朔夜の顔を見るとやんわりと笑んで礼を告げた。

「いえいえ。お代相応の仕事をしただけさ」
そう答え、朔夜は菖蒲の後ろに回ると肩に手をおいた。

「ちゃんとオレは菖蒲を送り届けたんで、あとは傍観させてもらおうよ？」

「わかりました。邪魔はしないという約束、きちんと守ってくださいね」

「へいへい」

二人のやり取りを聞いていても意味がわからない。菖蒲は朔夜の手が離れると同時に董を見つめる。董の着ていた真っ白なワンピースが風に揺れて広がる。真っ黒で艶やかな長い髪も風に流された。

（立っている姿なんて、随分振りだな……）

健康な身体を董に与えることは叶わなかった。科学の力に頼っても、どんなに聖人に願っても、どんなに強く思いをこめても、結局すべて駄目だった。上半身は動けても、下半身は自由にならなかったのだ。

（良かった。一時でも叶ったんだ……）

もう見ることはないんじゃないかと思っただけに、菖蒲は自分の足で立つ董の姿を見て嬉しく、幸せに思った。自然と顔が綻ぶ。

「董……」

「良かった。お姉ちゃん、笑ってくれて」

董もまた嬉しそうに微笑んだ。

「え？」

指摘されて、菖蒲の表情が固くなる。

「いつつも疲れた顔して私に会いに来るんだもん。たまに笑ってくれるけど、あれ、演技でしょ？ 心から笑えていないんだって、私、気付いてたよ」

さっと血の気が引いていくのを感じた。

「な、何言ってるのよ、董。演技じゃないって」

まさか、そんなふうに思われていたんだなんて。

「嘘。そんなの嘘。それともお姉ちゃん、嘘に慣れすぎて鈍感になってたんじゃない？ お姉ちゃんは、そういうところを意識しない人だから」

気付かれないように、意識していたはずなのに。

「そんなことないって」

取り繕うように告げるが、董は首を小さく横に振った。

「そんなことあるよ」

悲しげな表情。董のそんな顔を見せられて、菖蒲は何も言えずに黙り込む。

「誕生日にバイトして　そのお金、私のためなんですよ？　治療するのにもお金がかかるから」

「……」

「お姉ちゃんはいつも私のために一生懸命だった。何かあれば庇ってくれたし、私が言いにくくて黙っていたことも全部話して動いてくれた。とつても嬉しかったよ。でもね、とつても申し訳なく思っていたの」

「や、やだなあ。気にしなくていいのに。あたしが好きでやってきたことなんだから。董は董で好きなようにすればいいのよ。一人でやるのが難しいなら、今までどおりあたしが手伝うから。ね？　そんな変なこと言わないでよ」

嫌な予感がする。このままではまずいような気がする。落ち着かなくて、菖蒲は自身の胸に手を当てた。鼓動が早い。

「お姉ちゃんは何でもかんでも自分で引き受けてずるいよ。……私、そんなことをさせたくてお姉ちゃんに相談したわけじゃないのにさ……私はただ、お姉ちゃんの喜ぶ顔をずっと見ていたかっただけなのにさ……私のために精気を吸われて元気なくしている姿なんて、私見たくなかったよ」

その場に泣き崩れる董。ぺたりと座り込んでしまった彼女に、菖蒲は近付いて抱き締めた。

（そんな……）

思惑と異なることを言われて呆然とし、そんな空っぽの気持ちのまま菖蒲は董の隣に立つ聖人に目を向けた。悲しみの色で塗り固められた顔。それがただ菖蒲に向けられていた。

（聖人は、董がそう思っていたことを知っていたの？）

嘘だ。これは悪い夢。

菖蒲は次々と浮かぶ嫌な言葉を振り切りたくて、返す台詞を必死に探す。

「元氣なくしてって、それは気のせいだよ。あたし、元氣だし。毎日顔を見せに行っただでしょ？　そもそもあの病院、丘の上にあるから元氣じゃなかったら上れないし」

「お姉ちゃんはわかってない　お姉ちゃんはもう私から解放されるべきなんだよ。私に囚われすぎてるの。わかってるでしょ？」

「でも、それはあたしが自分で望んだことなんだから、董が気に入ることじゃないよ。ねえ、落ち着こう？　董、なんだかおかしいよ。いつもみたいに笑ってよ。せつかく外に出られたんだよ？　久し振りの散歩だよ？　ほら、見てよ。こんなに董の花が咲いてる。とっても綺麗じゃない。ゆっくりさ、この辺りを散策して、いっぱい話そうよ。そしたら病院に帰ろう。そうだ、今度見舞いに行くときは花を持って行ってあげるよ。窓がないから外の様子わからないし。季節に合わせた花、用意して届けてあげる。今だったらやっぱり董がいいかな。花屋に置いてあるといいけど、植木鉢じゃ根が張るから縁起が悪いし……ああ、あたしが途中で摘んでくればいいのか。それはそれで素敵だよな？　ねえ　」

「お姉ちゃん……」
涙でぐずぐずになった顔が目に入った。台詞を止められて黙る菖蒲に、董は続ける。

「もついいよ、お姉ちゃん。こんなに素敵な誕生日プレゼントをありがとう。久し振りにあの病室から解放されてとても嬉しかった。良い思い出になったよ」

袖口で涙をこしこしと拭くと、董はゆっくりと立ち上がる。

「だから、私からもプレゼントをあげるね。お姉ちゃんは私に自由をくれたから、今度は私がお姉ちゃんを自由にさせてあげる」

その台詞と同時に、董の周囲にふわふわとした綿毛が現れる。タンプオの綿毛のように見えたそれが、まったく別のものであることに菖蒲はすぐに気付いた。

「待つて。何やってるのよ、董。これ……この光……」

綿毛のようなものが精気であることに思い至ると、菖蒲は立ち上がって董に抱きついた。

「あんた……何を願ったのよ……あの悪魔たちに何を願ったのよっ！」

「お姉ちゃんの笑顔を取り戻す方法だよ」

力が失われているのだろう。か細い声が耳元で聞こえた。

「あたしはただ、董の笑顔をずっと見ていたかっただけなのに……なんで……なんでこんなこと……なんでこんなことを勝手にするのよっ……」

涙が頬に一筋の線を作る。

「私もずっとお姉ちゃんの喜ぶ顔を見たかった。でもね、今のままじゃ駄目なの。一人分の精気しかないのに、それで二人分の身体を動かすのって、やっぱり限界があるんだって。望月さんも天守さんも、そう教えてくれたよ？ そろそろ決めないと、どっちもいなくなるだろうって」

「やだやだやだっ！　なんで董が犠牲にならなくちゃいけないのよっ！」

言つて、菖蒲は抱きついて腕を離し、自身の胸に手を当てる。

「そうよっ。この一年あたしが自由にやってきたんだから、今度は董が自由になる番でしょっ！」

董の細い肩に手を置いて、菖蒲は必死に説得を続ける。

「なんなら、あたしの身体を董にあげるわよっ！　この身体なら、好きなところに自由にいけるじゃない。行きたい場所もいっぱいあるんでしょ？　高校に行きたいって言うていたじゃないっ！　部活やりたいって言うていたじゃないっ！　バイトもしてみたいって言うていたじゃないっ！　普通の恋愛をしたいって言うてたじゃないのっ！　全部……全部嘘だったってわけじゃないんでしょ！？」

本音だったんでしょっ！？」

「お姉ちゃん、わかかってない……」

ふるふると董は首を横に振り、そしてゆっくりと、はつきりとその言葉を続けた。

「その身体がね、私なんだよ」
頭の中が真っ白になった。

「今……なんて……」

その台詞を声にするのがやっとだった。

董は悲しげな瞳で菖蒲を見つめ、ぼつりぼつりと台詞を紡ぐ。

「あの時死んだのは私じゃなくて、菖蒲お姉ちゃんのほうだったの……。だから私、望月さんをお願いして、自分の思いを……魂の全部を賭けて、入れ替えてもらったのよ」

（なんだって……）

力が抜けていく。ショックで身体が動かない。

（この身体が……董だって……？）

董はとうとうと続ける。

「望月さんはちゃんと私の願いを叶えてくれた。だから私が死ぬはずだった。でも、お姉ちゃんは私が生き延びることを望んでくれた。強く強く願ってくれた。その思いを天守さんが叶えてしまった。

私を連れて行くなという心の底からの願い」

視線を外す聖人の顔を確かめて、董は続ける。

「私、恨んでないよ。私が目覚めたとき、お姉ちゃん、とつても不安げで寂しげな顔をしていたのに、すぐに笑顔くれたから。だから、私、どうして馬鹿な願いをしたんだろって思ったんだ」

そこまで告げると、董は瞳を伏せた。

「でもね、お姉ちゃん。誤算があったんだ。望月さんに聞いたの。どうして私は生きているのかって。そしたら説明してくれたよ。このままではいずれ近いうちに共倒れになってしまふよって」

自嘲気味に口元を上げる。笑って、董は告げる。

「だって、既にあの時、片方はもう取り返しつかない状態で、魂を構成できる精気はどう頑張ってみたところで、回復できるのは半身までだったんだもの。強い感情だけでは、必要な分の精気を取り

戻せるに至れなかったんだってさ。だから、一時的には何とかなくても、長期的に見れば不安定なまま。私は半身不随で、その上にお姉ちゃんの精気を望月さんや天守さんを経由してもらわねばならない身体になってしまっていた。疲れやすくなっていたはずなんだけどな。気付かなかったなんて、すごいよ」

「董……」

「お姉ちゃん、もっと笑ってよ。私はいなくなっても、私はずっと傍にいるから」

かくんつと董の身体は揺れて力なく崩れた。菖蒲は抱きとめて、しっかりと抱き締めた。

「董……」

董の身体は糸の切れたマリオネットのように動かない。まだ温もりを宿した身体をぎゅゅと強く抱き締めて、菖蒲はひたすら泣いた。

エピローグ 新たな日常

菖蒲と董の誕生日から十日後。董を失ってしばらく休んでいた菖蒲だったが、今日からは高校に復帰する。

「結局立ち直ったんだな」

ここは菖蒲の住むアパートの様子が窺えるマンションの一室。新しい制服を着込みアパートを出てきた菖蒲の姿を望遠鏡で見っていた朔夜は、隣で同じように眺めていた聖人に声を掛けた。

「てつきりオレは、恨み言を言われるんだとばかり思ってた覚悟していたんだけどね。どうにかならないのか、とか、蘇らせてくれ、とかさ。神を呪うとまで宣言した女なんだろ？ 心の底から本気で、さ。ちよつと期待ハズレ」

不思議そうに言う朔夜に、聖人は返す。

「彼女は董ちゃんの花顔を守りたかっただけですからね。内面的な喜びも、その表面に出る喜びも、そのすべてを愛し、守りたいと願った。ですから、真相を知って生きることを選んだのだと思いますよ」

菖蒲がきちんと学校に向けて歩き出したのを見て、聖人はほっと息をついた。

「で、どうするんだ？」

「どうするって、何をです？」

望遠鏡から目を離し、隣で窓に背を預けていた朔夜に問う。

「大抵の人間なら心が折れてしまうような状況を乗り切った女だ。あれだけの強い感情を生み出すことができる精気を持った彼女なら、さぞかし立派な子孫を残せるだろうな」

さらりと言われて、聖人は眉間にしわを寄せた。

「そういう品のない話はしてほしくありませんね」

「ってか、オレらはそのための存在だろ？ 女を孕ませて繁殖するわけで、それは人間の男と同じ。この奇跡を使う能力だって、そも

そも女に夢を見せて惹き付けるための道具じゃん。聖人っつー名前のおとりに綺麗ぶるなよ」

「はあやれやれと肩をすくめ、呆れ口調で告げる。

「正攻法の何がいけないんですか？　ちゃんと惚れさせて、それからですよ」

「めんどつくせーな。ちゃっっちゃと済ませること済ませりゃ良いのに」

「じゃあ、逆にお聞きしますけど、そっちは何の用でここに残っているんです？　君の用事は済んだでしょう？　菖蒲を董ちゃんのいる場所に連れて行き、その最期を見届けること　確か彼女の願いはそれでしたよね？」

面白くなさげに言くと、朔夜は口の端をきゅっと上げた。

「いや。願いはそれだけじゃないぜ？」

想定外の台詞に、聖人は不思議そうに首をかしげた。

「おや？　依頼人もいなくなったというのに、意外と君は律儀なタイプだったんですね」

「一言多いな」

煽るように言う聖人に、あからさまに嫌そうな顔をする朔夜。ぎすぎすした空気が一瞬流れる。沈黙を先に破ったのは聖人だった。

「で、何を董ちゃんは願ったんです？」

「菖蒲の笑顔を守ってくれってさ」

「……ほう」

聖人は顔を引きつらせた。ライバルになるとは思っていない聖人だったが、同業者がそばにいるのはやりづらい。

「ま、そういうことだから、菖蒲のそばには当分いるぜ。菖蒲が笑顔を保ったままでいられるようにオレは努力しなくちゃいけないからな。そうするのに十分な精気は董からもらっている」

そしてにやりと笑んで、獰猛な獣のような目で聖人を見つめる。

「菖蒲を落とすのを諦めて引き下がるなら今だぞ？　オレが彼女を落として笑顔を守る。ついでに子どもも生んでもらう。どうせその

様子じゃ、彼女の心を奪うまでには至れてないんだろ？」

直球で敵対心露わに挑発してくる朔夜を、聖人はふんつと軽く鼻で笑った。

「彼女がすぐになびくとは思えませんかね。菖蒲の理想とする男性像は、あくまでも僕なんですから」

「見た目と中身は別だろ？　いいように使われて、一族の恥だと思わないのか？」

「彼女は一筋縄ではいきませんよ。ましてや傷心の今を狙い、甘い言葉で優しく癒すことができたとしてもね。そもそも、彼女は君みたいなのには絶対に惚れませんよ。断言できます」

「ふつ。言つたな。あんたの端正な顔があとで吠え面をかくことになるのが楽しみだ」

言つて、朔夜は姿を消す。早速菖蒲を口説きに行ったのだろう。

「無理無理。君はすぐに嫌気が差しますよ」

ふうつと小さくため息をついて、聖人は部屋を見回す。

一人だけになった殺風景なワンルームの一室。ここを拠点に当分の間は活動することになるのだろう。菖蒲に何かがあればすぐに駆けつけることのできる絶妙な距離だ。

聖人は朔夜を追うような事はせず、望遠鏡を再び構えて菖蒲の姿を探した。彼女の後姿はすぐに見つかる。ついでに朔夜の姿も映つて、思わず顔をしかめた。

「ま、僕は僕の方法でゆっくりやりますよ。菖蒲自身がそれを願っているんですから」

聖人はそつと唇を舐め、ほくそ笑むのだった。

【了】

エピソード 新たな日常（後書き）

ここまでお付き合いくださいましてありがとうございます。少しでも楽しんでいただけたでしょうか？

もしご意見、感想等がありましたら

どしどし書き込んでいただきたいと思います。

参考にさせていただきます。

また、続編ネタも作者の中にはふつつつとしておりますので、そういったご意見をいただき次第公開したいなと思います。

ではまたどこかでお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1529u/>

醒めない夢に悪魔の口付けを

2011年9月18日03時10分発行